

2025年9月1日発行 通巻第323号

全科協

vol.55
NO.4 NO.5
合併号

News

CONTENTS	P2 特集
	P10 海外博物館事情
	P14 9月10月の特別展等
	P16 リニューアル情報
	P20 トピックス



表紙の写真の解説は、P20の「我が館の推しモノ・コト」をご覧ください

特集 Special

展覧会のその後

JCSM

Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

〒110-8718
東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
TEL 03-5814-9171
<https://jcsn.jp/>

展覧会のその後

展覧会は多くの館にとって、最大のイベントのひとつである。展覧会を担当する学芸員は、日頃の研究成果や、館が所蔵する資料の面白さや重要性、あるいは地域そのものが持つ魅力や可能性といったことを、展示を通して伝えることに腐心する。そのために何年も前から構想を練り、他館からの標本の借受の交渉や図録の執筆、また開幕直前となればつい遅くまで残って準備をしてしまうといったことは担当した者であれば誰も経験があることだろう。規模の大きさの違いはあれど、展覧会は担当者のパッションによって作られていると言っても過言ではないと考える。

一方で常設展示とは違い、展覧会には必ず会期があるものである。閉幕後は次の展覧会に備え、粛々と撤収作業が始まる。無事に展覧会を終えられた安堵感と、苦心して作った展示が終わってしまうことへの寂しさもまた、担当者であれば経験があることと思う。

さて、開幕前や会期中はさまざまな形で注目を集める展覧会だが、終わった後の取り組みやその後に起こったことについてはあまり知る機会がないように思う。特に展覧会のために制作したコンテンツにおいては、担当者の熱意だけではなく、相応の費用をかけたものが多く、なにかの形で常設展示や教育普及に応用できないかと考えたことも多いのではないだろうか。また来館者の目線としては、展覧会で見た標本について、ふとした時に「その後あれはどうなったのだろう」と思い返すこともあるだろう。

そこで今号では展覧会の閉幕後に焦点を当て、2つの館における展示内容や、付随して制作されたものの活用例について紹介していただく。また、さらに2つの館からは展示した標本そのものについてのその後の展開や、展示に使用する什器の開発と新しい可能性について紹介していただく。本特集が全国の「展覧会のその後」に悩む館の解決の糸口となったら幸いである。

岩手県立博物館 専門学芸員 望月 貴史

アンモナイト展のその後 ―移動展とアプリ開発―

福島県立博物館

主任学芸員 猪瀬 弘瑛

福島県立博物館では、規模の大きい企画展を例年3回実施しています。私は「アンモナイト合戦～アンモナイト vs 同時代の生き物たち～」(会期：令和4年4月23日から6月26日)という企画展(以降、アンモナイト展)を担当しました。このアンモナイト展のその後について紹介します。

アンモナイト展は、東北地方、とくに福島県浜通り地方から産するアンモナイト(アンモノイド)の多様性を紹介しようと企画したものです。当館が歴史系の博物館であること、多様性の背後には生存競争があることを踏まえ、タイトルは現代美術家の故折本立身先生(令和7年2月逝去)に名付けていただきました。目を引くタイトルのおかげもあり、当館の春の企画展としては非常に多い、8,928人の方に来ていただきました。

ただ、福島県立博物館は、アンモナイトを産する浜通り地方から遠い会津地方に立地しています。そこで、もっと気軽に地元の浜通り地方の方々に見ていただく機会があればと考えていました。浜通り地方北部に立地する南相馬市博物館に相談したところ、「アンモナイト合戦～アンモナイト vs 同時代の生き物たち～in南相馬」(会期：令和5年4月22日～6月11日)としてもう一度展示する機会をいただきました。南相馬市博物館では浜通り地方にお住まいの方を中心に1,212人の方に来てい

ただきました。中には、福島県立博物館と両方の展示を観覧した方もいらっしゃったということでした。

南相馬市博物館での展示にあたって、展示室が福島県立博物館よりもコンパクトであること、予算面の制約から借用先を大幅に減らす必要もあり、展示内容を見直しました。地元のアンモナイトのスペースを大きくし、解説パネルの数を絞りました。追加した資料は少なかったのですが、地元でアンモナイトを産する相馬中村層群の重要な化石として、恐竜の足跡化石も展示しました。福島県立博物館での企画展が閉幕した後の、令和4年度末に当館紀要で私も共著となった論文で初めて図示したばかりのアンモナイトも追加して展示しました。企画展はその時点での最新の知見に基づいてはいますが、日進月歩の研究によって企画展閉幕後も知見が更新されていくことを示せたかなと思います。

南相馬市博物館では、日ごろから展覧会やイベントで地元の方と協力しています。この展示でも、体験学習「化石を楽しもうーアンモナイト探しと標本作りー」として、地元の化石収集家である平宗雄さん、八巻安夫さんの案内でアンモナイトをはじめとした化石を探して標本化する講座を行いました。地元の化石を探すということは、展示への理解を深める貴重な体験になったと思います。また、平宗雄さんの収集した化石に触れるハンズ



南相馬での展示風景

オンコーナーも展示室入り口に設置しました。目で見ただけでは分かりにくい質感を知ることができ、これも展示を補強する形になりました。

私が講師となって、ワークショップ「アンモナイトの名前をあてよう！入門編」も実施しました。これは、アンモナイトの分類によく用いられる形質を、参加者と話しなが観察し、分類してみる体験です。なかなか意識することのない分類について知っていただく機会になったと考えています。

再度の展示ではありましたが、展示内容をさらに地元中心にフォーカスすることによって、入場した方々に楽しんでいただけたようです。

さて、福島県立博物館は福島県直営の公設公営館です。そのため、県議会での年度当初予算成立後から企画展の広報を開始することになっています。春の展覧会は、開幕まで時間が限られている状況です。この制約の中で広報を強化するべく、twitter（現在のX）に着目しました。目にとめていただこうと、予算成立後からアンモナイト展が開幕するまでの1か月間で299件もtwitterでつぶやきました。内容としては、ライトな一言コメントと標本情報、オーソドックスな写真と凝った写真でひとつずつ化石を紹介するものでした。多く投稿しすぎた気もしましたが、化石好きの方には注目していただけたようです。投稿にどれだけ反応があったかを示すツイートインプレッションは1か月で262,882と、前年度同時期の10倍以上を記録しました。

これらの投稿は、アンモナイト展の広報としては閉幕をもって役目を終えました。ただし、多くのネット情報と同じく、電腦空間には記録が残ります。そのことに目をつけられたのが、当館の近くに立地する会津大学の吉岡廉太郎先生と川口立喜先生でした。会津大学はIT系を専門としており、吉岡先生や川口先生たちが担当するソフトウェアスタジオという講義があります。この講義は、顧客の要求を受けて、チームでウェブアプリを開発するという実践的なものです。以前、私も顧客として参加し、博物館資料の簡易データベースアプリの開発をしていただいたことがありました。そうした経緯も

あり、声をかけていただきました。

吉岡先生や川口先生からソフトウェアスタジオの題材にしたいと打診を受けたときに、どうしてこのtwitter投稿を選んだのかが気になりました。先生たちによると、アンモナイト展のtwitter投稿は、項目を統一してあるので一種のデータベースとして活用できるということでした。もともと項目を統一したのは、読者の見やすさと私の作業の効率化（企画展の直前は、やはり多忙でした）のためでした。それがアンモナイト展閉幕後に役立つのは、意外でした。

ちょうど前述の南相馬市博での展示と講義の時期が重なっていたこともあり、展示の紹介もしつつ、顧客としての要求を学生に説明しました。展覧会のために作成したけれど活用されていない投稿を生かすこと、化石にそれほど興味のないライト層へ向けた発信ツールにしたいこと、さらに博物館の常設展に興味を持ってもらえるようになるとより良いことを伝えました。アプリの設計、開発、改良の各段階で、顧客として学生と意見交換をしました。

学生たちも本格的なアプリ開発は初めてで、試行錯誤の連続だったようです。単なる方法論を学ぶというよりは、プログラミングだけでなく現実世界の問題に取り組むことが重要な内容だということでした。現実世界の問題としては、チームリーダーを含めて役割分担をどうするか、具体的なアプリの内容、自分たちのスキルなどの制約条件、顧客への納品までの予定、進捗状況の管理をどのように行うのかといったようなことです。私の中ではやり切った感覚でいたアンモナイト展が、こうした教育に再び役立つとは思わなかったと思いながら、学生たちの奮闘ぶりを見ていました。作成されたアプリは、「アンモリウム」というタイトルでデジタル水族館のようなものです。アンモナイトたちがランダムで出現し、軟体部も復元された状態で画面内を泳ぎます。背景は、学生たちが描いた中生代や古生代のポップなイラストの海です。時間が経過すると、日中から夜に変化していきます。



アンモリウムの画面

それぞれのアンモナイトの標本情報を見ることもでき、展示室ともリンクさせています。

「アンモリウム」はまだ一般の方が利用できる状態にはなっていません。しかし、私たちが使うアプリのどれかに卒業後の学生が関わっているのだと思います。そう

考えると、社会貢献のひとつの形として意義があるのではないかと考え、紹介させていただきました。将来的に、一般の方が利用できる展示支援アプリを開発しようということで、会津大学と当館で引き続き研究しています。

展示会の垂れ幕を活用したアップサイクルについて

大阪中之島美術館

事業課 広報担当 横瀬 碧

1. 大阪中之島美術館のアップサイクルプロジェクト

当館の吹き抜けに掲げられた展示会の巨大な垂れ幕。展示会のキービジュアルを主に用いたこの垂れ幕は、2階から4階の展示室フロアへのエスカレーターからは左手前方に見え、これにより、これから鑑賞する展示会への期待が否応なく高まります。

この垂れ幕は、凛とした館の内装のなかでひときわ目を引くものですが、展示会の告知物の一つに過ぎず、閉幕すると役割を終え、処分されます。

アップサイクルとは、単に未活用品や廃棄物をリユース（再利用）、リサイクル（再生利用）するのではなく、元々のデザインや素材感を活かし、新しい価値を加えた製品として再利用することです。その過程から、クリエイティブ・リユース（創造的再利用）と呼ばれることもあり、多くの企業が独自の取り組みを始めています。

当館では、展示会ごとに制作し閉幕後は処分される垂れ幕を、開館した翌年の2023年度からアップサイクルしています。最初のアップサイクルではキャンペーン景品として、垂れ幕をブックカバーにしてプレゼントしました。その後、以下の表にありますとおり年4回程度のワークショップの形態に変更してアップサイクルの取り組みを実施しています。（※1）

これは、巨大な垂れ幕（縦10m×横2m）を裁断し、それを素材として参加者の手で加工することで、アップサイクルの過程の一例を体験できる内容になっています。

なお、当館は19世紀後半から現代までの美術とデザ

インを収集対象としていますが、これまで開催した展示会は必ずしもこの領域に限ったものではありません。したがって、垂れ幕のビジュアルが多岐に富むことを活かし、そのデザインや開催時期の季節感、そして参加者からのアンケートの声も参考にして制作物を検討しています。

加えて、夏季の開催は小学生とその保護者を対象としており、安全で容易な制作手順を重視し、夏休みの自由課題としても取り組んでもらえるものを選定しています。

また、当館は美術館としては初のPFI法（民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律）に基づくコンセッション方式（※2）により運営されており、展示会以外の付帯事業についても自由度の高い企画が可能のため、多様な外部組織との連携を取り入れています。本ワークショップはその1例でもあり、広告代理店のコーディネートにより、南大阪の社会福祉法人で就労する方々に垂れ幕を裁断していただいています。また、繊維商社のスタッフが講師を務め、参加者がはさみ



吹き抜けにかかる垂れ幕例

〈ワークショップ：2025年5月までの開催内容〉

開催日	展示会名	制作物
第1回 2023年5月28日（日）	「開館記念特別展 モデリアーニ ― 愛と創作に捧げた35年 ―」 「開館記念展 みんなのまち 大阪の肖像 第1期」	ハンギングオーナメント
第2回 2023年8月1日（火）	「大阪中之島美術館 国立国際美術館 共同企画 すべて未知の世界へ ― GUTAI 分化と統合」	ハニカムボール風鈴
第3回 2023年11月19日（日）	「ロートレックとミュシャ パリ時代の10年」	クリスマスツリー
第4回 2024年2月18日（日）	「開館1周年記念特別展 大阪の日本画」	フラワーデコレーション
第5回 2024年5月19日（日）	「民藝 MINGEI ― 美は暮らしのなかにある」	フラワープレート
第6回 2024年7月24日（水）	「開館1周年記念展 デザインに恋したアート♡アートに嫉妬したデザイン」	ハニカムボール
第7回 2024年11月24日（日）	「特別展 生誕270年 長沢芦雪 ― 奇想の旅、天才絵師の全貌 ―」	ブックカバー
第8回 2025年2月16日（日）	「決定版！ 女性画家たち的大阪」	吊るし雛
第9回 2025年5月11日（日）	「没後50年 福田平八郎」	フォトガーランド



制作例：第9回_星のフォトガーランド

と物品提供を受けた多用途接着剤を使い、自由な発想で制作物に仕上げていきます。

2. ワークショップ参加者の声

——ワークショップの参加者からは、以下のような様々な声が寄せられています。

- 「アップサイクルに携わって何かを作れるのは、とても良いワークショップだと思います。本来なら捨ててしまうものが活用されるのは、今後も続いてほしいです。」
- 「久々に工作をしました。SDGsは今後大切なことなので、こういう身近な取り組みを続けて欲しい。」
- 「アップサイクルというと手間ひまがものすごくかかるイメージがありましたが、楽しく作業できました。素材の垂れ幕のどの部分かなと探すのも楽しかったです。役目を終えた物を他の何かにして活用する。普段の生活の中でもすぐに捨てるのではなく、活用方法を考えてみるというワンクッションは有意義でした。ありがとうございました。」

これらの感想は、ワークショップを通して、参加者がアップサイクルの意義を実感できる機会となったことを示していると感じます。また、完成した制作物を参加者どうしで見せ合い、感想をかわすなど、この場で出会った人々の間に、朗らかなふれあいが見受けられたのは感慨深い点です。

3. 本プロジェクトの方向性

当館のアップサイクルは商品化を目的とするものではありませんが、参加者の生活空間を飾る装飾品や実用品として活用されることになります。また、プロジェクトを継続する意義としてはさまざまな要素を含んでいます。

ひとつは、環境の保全に対する当館の姿勢を示すものです。

当館の展覧会で作成する垂れ幕の素材は「トロマット」というもので、プラスチックの一種であるポリエステルからできています。プラスチックごみの海洋への流出がもたらす地球規模での生態系への悪影響は、国内外の各



ワークショップ風景（2F多目的スペースにて）

種メディアで頻繁に取り上げられています。海上保安庁の報告書（※3）でも、産業廃棄物の不法投棄など海洋汚染の実態を見ることができます。

本ワークショップは、プラスチックが単に産業廃棄物として処理されることを抑制することへの小さな貢献と考えています。

また、ワークショップは創造力を広げる場としても機能しています。

参加者は、資源の創造的な再活用だけでなく、垂れ幕のデザインや色合いからインスピレーションを受け、自分なりの素材のアレンジを模索します。参加者それぞれが個々の感性に向き合うなか、制作物の完成に向けての意欲的な作業と相まって、環境保全における人とモノとの関係性を改めて考える機会となるのではないのでしょうか。

4. 最後に

当館は2022年2月に開館し、ようやく本年4年目を迎えたところです。

人類が創造した貴重な文化財としての美術作品を未来の世代に引き継ぐための「収集・保存」と「調査・研究」、展覧会を通してその叡智に触れ、新たな知見の発見の契機となる「展示・公開・普及」という美術館の本質的な機能を果たすだけでなく、民間の事業運営のノウハウを活かした新しい美術館の姿として、引き続き真価を問われることになります。

また、社会教育機関として一方向で発信するだけでなく、地域コミュニティとの双方向の交流の場を提供する機能も求められています。末永く、より視野を広げた取り組みに挑戦したいと考えています。

【参考・出典】

※1：大阪中之島美術館 展覧会の巨大垂れ幕のアップサイクルプロジェクト開始

<https://nakka-art.jp/news/workshop-0528/>

※2：公共施設等運営（コンセッション）方式について

https://www8.cao.go.jp/pfi/concession/pdf/con_houshiki.pdf

※3：海上保安庁公式ホームページ

<https://www.kaiho.mlit.go.jp/doc/hakkou/toukei/toukei.html>

【アップサイクルプロジェクトの現在の構成】

《主催》大阪中之島美術館 (<https://nakka-art.jp/>)

《企画・運営》株式会社エスケーピー

(<http://www.nkb.co.jp/company/index.html>)

株式会社チクマ (<https://www.chikuma.co.jp/>)

《協力》社会福祉法人いちろうの森 (<https://ichou20.my.canva.site/>)

《物品協賛》コニシ株式会社 (<https://www.bond.co.jp/>)

企画展のために収集した化石が新種に!?

ミュージアムパーク茨城県自然博物館

加藤 太一

ミュージアムパーク茨城県自然博物館（以下、当館）では、年間3回程度の企画展を開催しており、資料収集や調査研究の成果を公開する良い機会となっている。本稿では、自然史系博物館ならではの事例として、企画展準備の資料収集によって得られた化石が新種のタイプ標本となった例を紹介する。

1. 化石発見の経緯

2020年、筆者は県内各地の露頭を調べ、地層の写真撮影や化石標本の収集を行っていた。これは、翌年に予定していた当館の第80回企画展「化石研究所へようこそ!」の準備の一環として、数年がかりの現地調査や文献調査の一部であった。

そんな折、茨城県北部で活動する化石蒐集家・角田昭二氏より、2012年に日立市の「高磯」と呼ばれる海岸でクモヒトデの化石を発見したという興味深い情報が寄せられた。現地の地質を確認したところ、その化石は新生代第三紀鮮新世の「初崎層」から産出した可能性が高かった。

あまり知られていないが、日立市に分布する「初崎層」は日本の古生物学の黎明期において重要な地層である。旧東京大学理学部地質学科の第二期生・巨智部忠承（こちべ ただつぐ）は、1883年に日本人として初めて化石に関する論文を発表しており、その研究対象は「初崎層」から得られた貝化石だった。以後、同層の化石に関するいくつかの研究はあったものの、クモヒトデの化石が報告された例はなかった。

県内産の希少な化石であれば、当館に収蔵し企画展で展示したい。そう考えた筆者は、角田氏の情報をもとに現地調査を行った。2020年7月22日、調査開始から間もなく、クモヒトデらしき化石を発見できた。転石からの産出ではあったが、母岩に高温型石英や貝殻片が含まれており、周辺に露出する「初崎層」に由来するものであると判断された。得られた標本を当館に持ち帰り、角田氏にも報告と感謝の連絡を行った。

2. 企画展での展示

2021年2月から6月にかけて開催された企画展「化石研究所へようこそ!」は、以下の5つの展示エリアで構成された。



新種ステゴフィウラ・タカイソエンスシスのパラタイプ (INM-4-17936)

- 「化石研究の過程」…化石の発掘から標本化、観察や比較による研究、成果の発表、そして展示・教育普及へ至る一連の流れを紹介するエリア。
- 「地質時代と化石」…地質時代ごとに代表的な化石を解説するエリア。
- 「化石の分類」…生物の分類群ごとに標本を紹介し、分類上の重要な特徴に焦点を当てるエリア。
- 「キッズラボ」…恐竜化石を中心に、子どもが身近で化石を観察し、研究者になったような体験ができるエリア。
- 「茨城県の化石研究最前線」…県内の地層と化石、およびそれらの研究動向を紹介するエリア。

「初崎層」産のクモヒトデ化石は、「茨城県の化石研究最前線」に展示した。この時点ですでに石田吉明氏（クモヒトデ化石の専門家）による研究が始まっていた。調査により、同種と思われる標本は当館の標本のほか、角田氏が発見した標本、そして日立市郷土博物館が所蔵する標本の計3点が存在することが判明した。展示と並行して学会発表や論文執筆の準備が進められ、この標本はまさに「化石研究最前線」の名にふさわしい展示となった。

3. 学会発表と論文出版

企画展終了後まもない2021年8月、化石研究会第39回総会・学術大会において、石田氏を中心とした研究チームによるオンライン口頭発表が行われた。筆者は「初崎層」の層序と化石の産出に関する内容を担当した。また、

CTスキャンを用いた研究手法の導入により、化石の内部構造も非破壊で観察可能となり、形態比較の精度が格段に向上した。

2023年4月5日、記載論文が日本古生物学会の英文誌 *Paleontological Research* (第28巻第1号) に掲載された。現生のクモヒトデ類に詳しい研究者が新たに加わり、現生16種を含む広範な比較検討の結果、“初崎層”の化石は既知種と明確に異なることが判明した。これにより、“初崎層”のクモヒトデ化石は新種 *Stegophiura takaisoensis* (ステゴフィウラ・タカイソエンシス) と命名された。これまで同属で知られていた化石種は白亜紀後期の *S. miyazakii* のみであり、本種はそれに次ぐ2例目の化石種である。

S. miyazakii は浅海の地層から発見されたが、*S. takaisoensis* は深海の堆積物から保存良好な状態で発見された。これにより、本属が白亜紀後期(約9000万年前)から新第三紀鮮新世(約400万年前)にかけて、浅海から深海へと生息環境を変遷させたことが示唆された。

4. 「タイプ標本」の常設展への追加

当館が所蔵する *S. takaisoensis* の第3標本は、記載論文 (Yoshida *et al.*, 2023) においてパラタイプに指定された。新種記載時に基準となる標本群は「タイプ標本」と呼ばれ、そのうち最も重要な1点がホロタイプである。今回は角田氏が最初に発見した標本(所蔵：国立科学博物館)がホロタイプに指定された。

パラタイプは、ホロタイプとともに種の特徴を示す重要な標本であり、ホロタイプの消失時には新たな基準標本(ネオタイプ)となることもある。特に化石の場合、パラタイプがホロタイプに見られない部位を保存していることも多い。今回、当館の第3標本は3点のうち腕部が最もよく保存されており、その末端構造の観察に役立った。

論文の公開を受け、当館ではこのパラタイプ標本を常設展示に加えることとし、第7展示室「茨城の自然」の「茨城の地学」コーナーに設置した。現在のところ、これは当館で常設展に展示されている唯一のタイプ標本である。

現生の動植物のタイプ標本は剥製やさく葉標本などが指定されるが、これらは温湿度や紫外線量などの環境管

理が厳密になされる必要があるため、常設展への設置は困難である。しかし、本標本は化石であるため、物理的破損のリスクが十分にコントロールできれば、常設展への設置に関して問題が少ない。そのため、地域の自然を伝える資料であると同時に、タイプ標本について解説することのできる貴重な展示物となった。



常設展での展示のようす

5. 企画展が博物館にもたらすもの

企画展が博物館にもたらす意義は、単に入館者数の増加にとどまらない。企画展は、調査研究や資料収集の成果を広く紹介する場であり、また、常設展では難しい最新の研究成果や話題を発信できる貴重な機会である。

加えて、担当職員の専門性の向上や、外部研究者とのネットワーク構築にもつながる。今回筆者が改めて実感したのは、企画展の準備過程が、予想外の学術成果につながる可能性を秘めているということである。

特に地方の自然史系博物館では、企画展の準備が地域資料の再調査や収集の契機となることが多く、そこには未記載種などの重要な標本が含まれている可能性もある。企画展の準備は多大なる労力を要するが、研究的な視点を持って取り組むことで、博物館活動全体をより実りあるものにすることができるだろう。

博物館の資源循環を目指した展示什器の開発

国立科学博物館

泉谷 尚宏 久保 匡

1. はじめに

ある日、当館の館長からこんな話があった。
「展覧会における廃棄物を減らし、科博として持続可能な展示作りに取り組めないか。」

当館では、年間に大規模な展覧会(特別展)を3回、中規模な展覧会(企画展)を4回ほど開催している。これまで、そこで使用される展示什器の多くは展覧会ごとに製作・廃棄されてきた。この課題解決を求められたが、展示する標本・資料の大きさや形状が多様のため、継続

的にリユースするためには膨大なサイズ、形態の展示什器を保有しなければならず、製作コストや保管場所不足により実現するのが困難であった。これは、当館だけでなく、日本の展覧会事業において共通の課題であると認識している。しかし、環境保全に対する配慮に加え、昨今の物価高等の影響もあり、限られた予算の中で質の高い展覧会を維持するためには、製作費・運搬費・廃棄費を展覧会ごとに負担するのは経済的ではなく、従来のスキームを見直すことが急務であると感じた。

そこで本プロジェクトでは、展覧会事業にリユースの可能性を拓ける新しい試みとして、多様なサイズの標本・資料に対応できる汎用性を有し、かつ繰り返し再利用ができる展示什器の開発を目指した。

2. 科博オリジナル展示什器の開発

当館では、館の将来的な発展に向けた投資や試験的な取組を館長の裁量にて支援する館内予算(館長支援経費)を確保している。展示什器の開発にあたっては、これに申請し、プロジェクトを開始した。単に経済性を追求するだけでなく、多様な標本・資料や展示手法に活用できる「汎用性」、少ないスペースでも保管可能な「保管性」、ある程度大きい展示物にも活用でき長期間使用可能な「耐久性」を重視し、「何を展示するか、何に載せるか、どうやって見せる／魅せるか」という点と向き合うことで、展覧会事業を次のステージへ昇華させていくことを意識した。

実際に開発した什器については、図1を参照していただきたい。土台部分を共通の什器として作成し、ディスプレイボックスを入れ替える(スタックする)ことができる仕様となっている。それに加え、ディスプレイボックスは天板の入れ替えができ、多様な標本・資料を様々な展示手法で展示できる汎用性を実現した。ディスプレイボックスは種類に問わず重ねることができることで保管性をもたせ、さらに、土台部分を何台か組み合わせ、大きめの展示台として耐荷重を分散させるこ

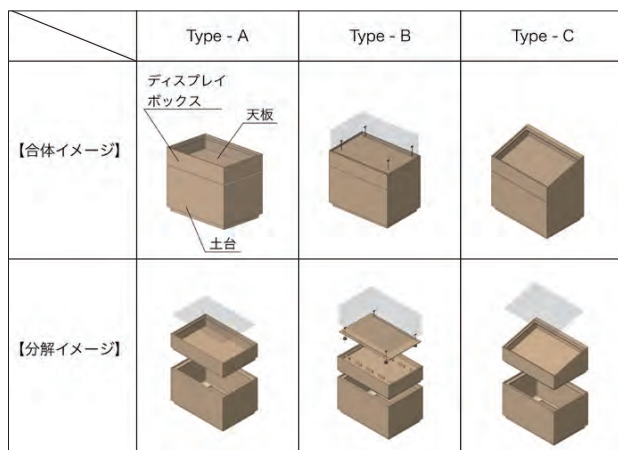


図1：スタッキングケース イメージ

とである程度の重量のある標本・資料でも展示が可能である。私たちはこの什器の名称を「スタッキングケース」とし、展覧会ごとに演示のアイデアを蓄積し、今後さらなる改良を重ねていきたいと考えている。

3. 「一枚の板」がつくる演示の実例

スタッキングケースは、展示資料に合わせてType-A, B, Cと三つの形態で構成されており、すべて一枚の板を起点に演示が行われる。ここではスタッキングケースを用いた演示の具体例を三つ紹介したい。

3-1. 液浸標本の場合

液浸標本は背の高いすり合わせ瓶に入れて展示することが一般的である。このすり合わせ瓶は天井からスポットライトで照らすとアクリルカバーに写り込み、良好な鑑賞環境が作れない懸案があった。このような場合は、すり合わせ瓶に照明の光源を近づけることで標本を鮮明に照らし出すことが可能となる。そこで、スタッキングケース Type-A の天板にすり合わせ瓶と同径の開口を設け、内部に照明を仕込むことで底面から照らすことを考案した(図2)。配線は天板の下に隠れるので来場者の目に触れず、標本のみを良好な環境で鑑賞してもらうことができる。天板の開口サイズを調整すれば、様々なすり合わせ瓶のサイズに対応することができ、またアクリル包埋の植物標本などに用いても効果的である。



図2：液浸標本の演示例

3-2. 貝類標本の場合

貝類標本は形態が多様である。巻貝などはその特徴的な形態から平置きで展示をするには安定性に欠ける懸念があった。そこで、天板にライオンボードという発泡素材を敷き、貝類の形状に合わせた彫り込みを設けることで平置きで安定させることを考案した。また、貝殻の模様の多様さ、美しさも貝類標本の特徴である。これらは適切なライティングによってその鑑賞的価値を高めることができる。Type-Aを用いて間接照明によって全体を

満遍なく明るく照らす方法と、Type-Bを用いてマイクロピンスポットで範囲を狭めて象徴的に照らす2パターンを考案した。このマイクロピンスポットは、天板にスリットを設けることでその位置を容易に調整することができる。この演示手法は、表面に微細な凹凸を有する化石資料に用いても効果的である。

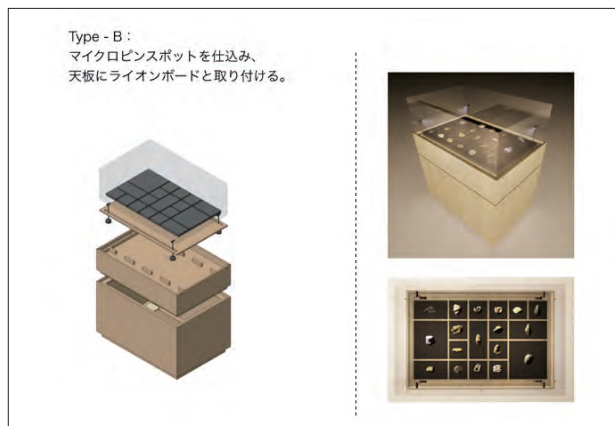


図3：貝類標本の演示例

3-3. 解説テキストの場合

最後の例は標本ではなく解説テキストの演示手法についてである。展覧会の場合、展示する物を用いて伝えたかったことは解説テキストとして来場者へ伝えられる。標本は展示ケースの中に、解説テキストはパネルとして壁面に取り付けられることが一般的だが、ここではそれらを一体化することを試みた。天板に解説テキストをダイレクト印刷し、その上に標本を配置するという「重ね置き」手法を考案した。標本と解説テキストの配置を細かく調整し、例えば標本の注目してほしい外形箇所に重なるように、天板に引き出し線と解説テキストを印刷する。こうすることで来場者はその箇所に関連する解説ということが直感的に理解でき、また視線を移動する必要がなくスムーズに情報を受け取ることができる。この場合は天板が斜面になっているType-Cを用いることで、



図4：解説テキストの演示例

来場者の可読性を高めることができる。解説テキストを天板に入れ込むこの手法は、壁面を立てることができない移動式展示（例えば学校などへの貸出展示）の際にも効果的な手法であり、頻繁に入れ替える場合は出力シートへ印刷したもので代用可能である。

ここで紹介したように、展示資料・演示意図にあわせて3つの形態を使い分けることで、多様な展示資料に対応し、また担当者のアイデアを実現することができるのだ。

なお、本稿で紹介した演示手法の考案は、株式会社博展の空間デザイナーである諸戸里帆氏に協力いただいた。

4. 今後の展望—アイデアを全国の博物館の集合知に—

博物館の展覧会事業は、製作と廃棄を繰り返しながら進んでいる。製作の際に込められた担当者の独創的な演示のアイデアも、残念ながら展覧会の閉幕とともに人目に触れる機会を失ってしまうことが一般的と思われる。標本・資料は博物館の大切な資源であるが、それを展覧会にて「見せる／魅せる」ためのアイデア、展示を作ることのでられる知見そのものも、大切な資源と言えるだろう。本稿で紹介したスタッピングケースは、そんな展覧会事業の動きを「一枚の板」という媒介物を通すことで、廃棄から再利用へ導くことを目指したプロジェクトである。

最後にこのプロジェクトの展望を紹介したい。「一枚の板」に込められたアイデアをアーカイブし、全国の科学系博物館の集合知とすることである。標本・資料を「見せる／魅せる」ためのアイデアは、全国の科学系博物館で展覧会ごとに生み出されている。博物館が所蔵する標本・資料が増え続けるのと同じく、そのアイデアも全国規模で増え続けている。これらの知見を共有するプラットフォームを作ることができれば、担当者のアイデアは時間と地域を超えて引き継がれ、磨かれ、姿を変えて再び来場者の目に触れることになる。いつの日か、このような集合知が「廃棄から保管へ、保管から再利用（リユース）へ」と展覧会事業の在り方を変えていく契機になれば幸いである。

ここを動かす空間をつくりあげるために。

調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営

 **Tanseisha**

空間創造のプロフェッショナル 株式会社 丹青社

〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F
TEL 03-6455-8100 (代表) URL www.tanseisha.co.jp

札幌・仙台・新潟・名古屋・京都・大阪・福岡・那覇・上海



■ 新設館

米ローワン大学に、エーデルマン化石博物館が開館
(2025年3月)

2025年3月29日に、米東部の主要都市フィラデルフィア(都市圏人口:624万人)の近郊にある、マンチュア(ニュージャージー州の村)に、エーデルマン化石博物館が開館した。同館は、ローワン大学(創立1923年)の地球・環境学部の附属施設として設けられ、古生物学の研究を中心に、生物多様性、地球科学と環境教育の活動を展開していく博物館施設だ。常設展示では、ニュージャージー州内で化石が発掘された、ハドロサウルスやドリプトサウルス、アストロドンなどの恐竜の復元模型が目玉になっており、また屋外に隣接した化石発掘現場では、研究者による化石の発掘作業が見られ、観覧者参加の化石発掘イベントも計画されている。なお建物は、もともと1925年からインバーサンド社(ニュージャージー州クレイトンに本社を置く、水質浄化材の製造メーカー)が操業していた泥灰岩採石場(約16,810㎡)の上に建てられている。この泥灰岩採石場は、エーデルマン化石博物館の整備のために、2015年にローワン大学によって195万ドルで購入された。これまで同採石場からは、モササウルス、ウミガメ、ワニなどの海の生き物、サメの歯など、10万点を超える化石が発見されている。新しい施設は、ローワン大学の同窓生のリチャード・エーデルマンとその妻ジーンから2,500万ドルの寄付を受けて整備された。館長は、地質学科教授のケネス・ラコヴァラ博士(Dr. Kenneth Lacovara)。



図1 エーデルマン化石博物館に隣接した採石場の化石発掘イベント
Copyright Edelman Fossil Park & Museum at Rowan University

Edelman Fossil Park & Museum. Rowan University.
Mantua, New Jersey.

<https://www.rowan.edu/fossils/>

<https://www.inquirer.com/columnists/edelman-fossil-park-museum-dinosaurs-opening-lacovara-20250327.html>
<https://youtu.be/V2FCMcnYU0?t=5>

■ 施設名の名称変更

米シカゴ科学産業博物館が、グリフィン科学産業博物館
に名称変更(2024年5月)

2024年5月19日に、イリノイ州シカゴ(都市圏:940万人)にあるシカゴ科学産業博物館が、その館名をケネス・C・グリフィン科学産業博物館に正式に変更した。同館は、1926年の設立以来、「Science and Industry Museum」を正式名称として使ってきたが、2019年に米ヘッジファンド「シタデル・セキュリティーズ」の創業者のケネス・C・グリフィンから、総額1億2,500万ドルの寄付を受けて、館名の名称変更を検討してきた。この寄付が、同館の歴史において、最高額の寄付だったことから、館名もアメリカで広く浸透している企業のマーケティング戦略のひとつである、ブランディングの考えをとりいれて、寄付者であるケネス・C・グリフィンの名前を冠した名称に変更した。

Kenneth C. Griffin Science and Industry Museum.
Chicago, Illinois.

<https://www.msichicago.org/press/press-releases/introducing-the-kenneth-c-griffin-museum-of-science-and-industry>

■ 常設展

米アメリカ自然史博物館に、ステゴサウルスが登場
(2024年12月)

2024年12月12日に、米ニューヨーク(都市圏人口:2,230万人)にある、アメリカ自然史博物館に、ステゴサウルスの骨格標本1体が、4年間の期間限定で、同館の常設展示ホールに登場した(ニックネーム:エイペックス Apex)。これまで発見されたステゴサウルスの標本の中で最大かつ最も完全に近いもののひとつと考えられている「エイペックス」が、現在、同館のケネス・C・グリフィン・エクスプロレーション・アトリウムで展示されている。1億5,000万年前の化石は、高さ3.5メートル、全長8.2メートル。このステゴサウルスの標本は、2022年にコロラド州ダイナソーリッジのモリソン層群から発見された。非常に保存状態がよく、320個の独立した骨のうち、254以上が残っている。欠けている部分は、3Dプリントで作成したレプリカパーツで補われている。

同館の古生物学部門の研究者たちは、エイペックスか

らのデータだけでなく、所藏品や他の博物館にある所藏品からのデータも活用しながら、ステゴサウルスの成長、生活史、変異を調査するために、この標本を研究する予定である。なお当該のステゴサウルスの標本は、サザビーズのオークションで2024年7月に過去最高の4,460万ドルで落札された。落札者は、著名な美術品コレクターであり、ヘッジファンド「シタデル・セキュリティーズ」の創業者のケネス・グリフィン（55歳）。エイペックスが展示されている、ケネス・C・グリフィン・エクスプロレーション・アトリウムは、2023年5月に新しく完成した別館「ギルダー・センター」（総工費4億6,500万ドル）の中に、グリフィン氏からの寄付4,000万ドルで設けられたアトリウムだ。



図2 アメリカ自然史博物館で展示中のステゴサウルス
“Side view of Stegosaurus specimen Apex on display at the American Museum of Natural History” by DraconicDark in January 2025 is licensed under CC BY-SA 4.0

Stegosaurus Fossil “Apex”.
Kenneth C. Griffin Atrium.
Richard Gilder Center for Science, Education and Innovation.
American Museum of Natural History, New York.
<https://digitalcollections.amnh.org/Browse/Press-Centers/Press-Center/Apex-Stegosaurus-Press-Kit>
<https://www.amnh.org/exhibitions/apex-stegosaurus-fossil>
<https://www.nytimes.com/2024/12/05/arts/most-expensive-stegosaurus-american-museum-of-natural-history.html>
<https://www.afpbb.com/articles/-/3528793>
<https://youtu.be/GmCMY-VIyJU?t=13>
<https://www.gsd.harvard.edu/2023/04/the-american-museum-of-natural-history-reveals-gilder-center-designed-by-studio-gang/>
印コルタカ科学館で、気候変動展がオープン
(2025年1月)

2025年1月11日に、インドは西ベンガル州コルタカ（都市圏人口：2,110万人）にある、コルカタ科学館で、気

候変動をテーマにした常設展「地球は、危険な状況にあるのか？ On the Edge?」がオープンした。同展は、インドの博物館にとって、気候変動に挑戦した、初めての展示だ。

展示は、約900㎡の展示スペースを使って、三つのセクションによって構成されている：「気候変動の影響」「なぜ気候は変化するのか?」「緩和と適応策」。「気候変動の影響」のセクションでは、気候変動が世界中の地域社会に及ぼす具体的な影響を鮮明に示している。ここでは、氷河の融解、海面上昇、生態系の変化が具体的に紹介されている。またモンスーンのパターンの変化や沿岸都市への脅威といった、インド特有の事情の紹介にも力を入れている。「なぜ気候は変化するのか?」のセクションでは、自然な気候変動と、人為的につくられた危機的な気候変動の危機を科学的に区別されて紹介されている。ここでは、氷床コアや樹木の年輪を使って、気候の変動の記録が紹介されている。またある一線を越えたら、破滅的で取り返しのつかない結果につながる可能性も警告している。「緩和と適応」のセクションでは、適応策と緩和策を通じて、気候変動と闘うための実行可能な解決策が提示されている。ここでは、温室効果ガスの排出を削減する技術や、日常生活で持続可能な方法を取り入れるよう促している。「地球は、危険な状況にあるのか?」のセクションでは、気候変動に関する神話の払拭と事実の立証にも力をいれている。気候変動は純粋な自然現象であるという考えなど、よくある誤解を取り上げられている。また、事態の緊急性を強調し、無為無策の日が続くごとに、人類は取り返しのつかない転換点に近づいていることを強調している。



図3 コルタカ科学館の外観
“Science City Koltaka” by Biswarup Ganguly in February 2010 is licensed under CC BY-SA 3.0

On the Edge?
Science City, Kolkata, West Bengal.
<https://ncsm.gov.in/events/inauguration-of-a-state-of-the-art-gallery-on-climate-change-titled-on-the-edge-by-honble-union-minister-of-culture-and-tourism-at-science-city>
<https://www.telegraphindia.com/my-kolkata/events/union-culture-and-tourism-minister-gajendra-singh->

shekhawat-opens-indias-first-climate-change-gallery-on-the-edge-opens-at-science-city-in-kolkata-on-janu/cid/2076952

<https://youtu.be/uIugVTVVnIw?t=10>

米ニューメキシコ自然史・科学博物館に、「太古の生命」展がオープン（2025年2月）

2025年2月15日に、ニューメキシコ州アルバカーキ（都市圏人口：91万人）にある、ニューメキシコ自然史・科学博物館に、常設展「太古の生命」がオープンした。同展（約280㎡）では、古生代に生きていた生物が、約300点の化石標本で紹介されている。中でも、州最古の化石である三葉虫の外骨格標本をはじめ、スフェナコドンの頭部化石やドラコプリステイス・ホフマノラムの全身骨格化石が目玉展示になっている。「太古の生命」は、アルバカーキに本社を置くブラッドバリー・スタム建設会社からの寄付で整備された。

Bradbury Stamm Construction Hall of Ancient Life.

New Mexico Museum of Natural History and Science.
Albuquerque, New Mexico.

<https://www.nmnaturalhistory.org/>

https://www.abqjournal.com/lifestyle/article_538fff28-e690-11ef-b745-8360e9621209.html#1

■企画展・特別展

ノーベル賞博物館で、気候変動写真展（カリン・アルフレッド写真展）を開催

2025年3月7日から2025年5月11日まで、スウェーデンの首都ストックホルム（都市圏人口：241万人）にある、ノーベル賞博物館で、気候変動をテーマにした写真展「雪も雨も過ぎ去る Snow and Rain Shall Pass」が開催された。同展は、スウェーデン生まれの写真家カリン・アルフレッドが、気候変動によって、危機的状況にさらされている、世界各地の氷河、森林、海洋、河川を写した作品で構成されている。

Snow and Rain Shall Pass.

Nobel Prize Museum. Stockholm

<https://nobelprizemuseum.se/en/snow-and-rain-shall-pass/>

<https://www.karinalfredsson.com/>

<https://www.galleriglas.se/artists/38-karin-alfredsson/biography/>

豪オーストラリア博物館で、動物図譜展（シンガポール国立博物館所蔵品展）を開催

2025年5月10日から2025年9月7日まで、オーストラリア最大の商業都市シドニー（都市圏人口：525万人）にある、オーストラリア博物館で、マレー半島の動物を描いた水彩画展が開催された。同展は、シンガポール国立博物館の動植物図譜「ウィリアム・ファーカー自然史画コレクション」（総点数：477点）のうち、マレー半島

に棲む動物の水彩画36点を選別されたものだ。

ウィリアム・ファーカー自然史画コレクションは、イギリスのシンガポール植民地軍のウィリアム・ファークワール司令官（1774-1839）の委託を受け、中国人画家によって描かれた動植物を描いた477点の水彩画で構成されている。これらの作品は、中国の伝統的な筆遣いをういながら、西洋の視点と自然主義を融合させている。同コレクションは、芸術的価値だけでなく、科学的意義においても高く評価されており、動植物の精緻な描写が特徴的なこれらの画は、19世紀のマレー半島の豊かな生物多様性を示す貴重な記録となっている。

Tails from the Coasts: Nature Stories of Singapore.

Australian Museum. Sydney, New South Wales.

<https://australian.museum/exhibition/tails-from-the-coasts/>

<https://www.nhb.gov.sg/nationalmuseum/-/media/nms2024/exhibition/tails-from-the-coasts/tails-from-the-coasts-gallery-guide.pdf>

米ファーンバンク自然史博物館で、「絶滅と絶滅の危機：危機に瀕した昆虫」展（レヴォン・ビス写真展）を開催

2025年8月9日に、ジョージア州アトランタ（都市圏人口：630万人）にある、ファーンバンク自然史博物館で、「絶滅と絶滅の危機：危機に瀕した昆虫」展が開幕した。イギリス生まれの写真家レヴォン・ビスによる、大判マクロ写真を通して、絶滅の危機に瀕している、あるいは絶滅した昆虫種19種に焦点を当てて、昆虫が生態系で果たす重要な役割に対する新たな視点を提供し、これらの昆虫が直面するリスクを紹介している。とりわけ、生息地の破壊、農薬の使用、気候変動など、昆虫が直面する脅威について詳しく紹介している。「絶滅と絶滅の危機：危機に瀕した昆虫」展は、アメリカ自然史博物館が企画・制作した巡回展である。会期は、2025年11月25日まで。

Extinct and Endangered: Insects in Peril.

<https://fernbankmuseum.org/experiences/exhibits/special-exhibits/extinct-and-endangered-insects-in-peril/>

<https://youtu.be/GAB3vrYx5iU?t=12>

<https://www.levonbiss.com/>

<https://youtu.be/zSCR8fWuC-Y?t=13>

米テキサス科学・自然史博物館で、ホビー・エバーリー望遠鏡展を開催

2024年10月1日に、テキサス州オースチン（都市圏人口：247万人）にある、テキサス大学オースチン校のテキサス科学・自然史博物館で、ホビー・エバーリー望遠鏡展が開幕した。同展では、北米最大の光学望遠鏡であるホビー・エバーリー望遠鏡（HET）の縮尺模型（1/14）を中心とした展示で、天文学者がどのように宇宙の驚異を探求しているかを紹介している。テキサス州西部のマクドナルド天文台に設置された、重さ80トンのホビー・エバーリー望遠鏡展は、分光観測用に設計され、恒星や

銀河からの光を解説し、太陽系外惑星の探索や遠方の銀河やブラックホールの研究に役立っている。会期は、2025年12月31日まで。

Big Eye on Dark Skies: The Hobby-Eberly Telescope.
Texas Science & Natural History Museum. Austin, Texas.

<https://sciencemuseum.utexas.edu/exhibit/big-eye-on-dark-skies/>

<https://youtu.be/FCAt8n8SYTU?t=5>

全米第一次世界大戦記念博物館で、人工装具展を開催

2023年6月8日から2024年6月8日まで、ミズーリー州カンザスシティ（都市圏人口：240万人）にある、全米第一次世界大戦記念博物館で、人工装具のデザインと制作を紹介した企画展が開催された。展示では、第一次世界大戦で負傷した兵士のために制作された義肢などの人工装具をはじめ、現在開発されている最新の義肢が紹介されている。

同展は、2020年1月に発行された、同名の単行本（共著：Amanda Hawkins + Sam Aquillano）をもとに、企画された。200頁の同書では、義肢の500年の歴史、手足を失った人々の生活を変えたデザインのストーリー、世界的な影響、運動能力、バイオニクスなどを網羅している。発行：Design Museum Press.

Bespoke Bodies: The Design & Craft of Prosthetics.
National WWI Museum and Memorial. Kansas City, Missouri.

<https://www.theworldwar.org/bespokebodies>

<https://designmuseumfoundation.org/program/bespoke-bodies/>

<https://codesigncollaborative.org/event/exhibit-wwi/>

<https://www.washingtonpost.com/wellness/2023/06/25/prosthetics-evolution-since-world-war/>

<https://www.amazon.com/Bespoke-Bodies-Design-Craft-Prosthetics/dp/0999090623>

米シンシナチー美術館で、自転車の芸術展を開催

2025年4月4日から2025年8月24日まで、オハイオ州シンシナチー（都市圏人口：227万人）にある、シンシナチー美術館で、自転車の設計と美をテーマにした、企画展「Cycle Thru! The Art of the Bike」が開催された。同展では、1860年代に生まれた初期の自転車から現在まで制作された各時代の代表的な自転車が紹介された。展示では、設計だけでなく、美の追求の足跡をも紹介した。同展は、全米自転車博物館（オハイオ州ニューブレイメン）の協力を得て、企画・制作された。

Cycle Thru! The Art of the Bike.

Cincinnati Art Museum. Cincinnati, Ohio.

<https://www.cincinnatiartmuseum.org/about/press-room/take-a-timeless-ride-at-cycle-thru-the-art-of-the-bike/>
<https://www.cincinnatiartmuseum.org/art/exhibitions/>

[cycle-thru-the-art-of-the-bike/](https://www.cincinnatiartmuseum.org/art/exhibitions/cycle-thru-the-art-of-the-bike/)

<https://www.cincinnatiartmuseum.org/art/exhibitions/cycle-thru-the-art-of-the-bike/audio-exhibition-cycle-thru-the-art-of-the-bike/>

英キャプテン・クック記念博物館で、「航海と宇宙旅行における健康管理」展を開催

2025年2月8日に、イングランド地方北部のウィットビー（都市圏：12,000人）にある、キャプテン・クック記念博物館で、18世紀の航海における健康管理を検証した企画展が開催されている。同展では、船乗りが長旅で直面した危険を詳細に検証し、英海軍の外科医の役割に焦点を当て、彼らがどのような医療器具を使っていたか、そしてどのような医療技術を用いていたかを紹介している。同展では、18世紀当時の英海軍で常に遭遇していた健康上のリスクと、火星への宇宙飛行士が直面するリスクを比較対照することも試みている。会期：2025年11月2日まで。

Uncharted Dangers: Health at Sea and in Space.

Captain Cook Memorial Museum. Whitby, North Yorkshire.

<https://www.cookmuseumwhitby.co.uk/visiting-us/special-exhibition-2025>

<https://www.captaincookmuseumsociety.com/event/id/11547/exhibition-about-health-at-sea-and-in-space-at-ccmm-whitby-until-2-november-2025>

■閉館

英空軍通信博物館が閉館（2024年6月）

2024年6月8日に、イングランド地方東部のベッドフォード州のヘンロー空軍基地内にあった、英空軍通信博物館が閉館した。閉館の理由は、入館者減少にともなう経営不振だった。閉館に先だって、通信記録を除く収蔵品はすべてオークションにかけられ、閉館のともなう整理にあてられた。2000年に開館した同館は、すでにイングランド地方南部のブランドフォード陸軍駐屯地にあった英陸軍通信博物館（1930年代にイングランド地方北部のキャタリック陸軍駐屯地に開館）を吸収して設立された。英陸軍通信博物館には、クリミア戦争に導入された電信をはじめ、暗号技術や、太平洋戦争中に、英陸軍通信隊のエリック・ロマックス中尉が、ビルマで日本軍に捕捉され、終戦まで捕虜収容所で着ていた軍服など、150年にわたる英陸軍通信隊に関連した歴史資料が収集されていた。

Signals Museum. RAF Henlow, Henlow, Bedfordshire.

<https://signalsmuseum.uk/>

<https://www.signalsmuseum.uk/MuseumHistory.html>

<https://signalsmuseum.uk/Closure.html>

<https://signalsmuseum.uk/Equipment/index.html>

List of special
exhibition!

9月10月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
あすなろ会子ども遊学館 (釧路市子ども遊学館)	宇宙月間	9月1日～9月30日
	遊びんピック	10月11日～10月13日
岩手県立博物館	テーマ展「いわての酒造り～酒からSAKEへの今昔物語～」	9月27日～12月7日
奥州市牛の博物館	第33回企画展「和牛」	7月19日～10月19日
高柳電設工業スペースパーク (郡山市ふれあい科学館)	ホワイエ企画展「日本星景写真協会写真展「星の風景 2025」」	7月5日～9月28日
	鉄道の日「鉄道フェスティバル」	10月11日～10月13日
産業技術総合研究所 地質標本館	特別展「地質とAI～地球を読み解く新たなアプローチ～」	4月22日～9月7日
ミュージアムパーク茨城県 自然博物館	恐竜とともに生きた生物たちーぼくらは脇役じゃないー	7月5日～9月15日
	どんぐりー魅力に はまって さあたいへん♪ー	10月11日～2026年1月25日
日立シビックセンター科学館 サクリエ	ミニ企画展示「Skill is Magic! 技能五輪」	10月4日～11月30日
栃木県立博物館	テーマ展「恐竜の小部屋」	7月19日～11月3日
	テーマ展「どーしたもんだろ とちぎの外来生物」	7月19日～2026年4月12日
	企画展「“異”常の色・形～時に思いが宿るもの～」	10月4日～11月24日
群馬県立自然史博物館	第72回企画展「ながいながい骨の旅」	7月19日～12月7日
群馬県立ぐんま昆虫の森	企画展「ぐんま昆虫の森企画展 20年のあゆみ」	7月12日～10月28日
	季節展「秋の野山の昆虫」	9月6日～10月28日
鉄道博物館	「こころ、はずむ、出会い ～観光列車の世界～」	7月12日～9月29日
埼玉県立川の博物館	特別展「昆虫いろいろ～標本から見える昆虫の世界～」	7月12日～9月15日
埼玉県立自然の博物館	特別展「群れる鳥」	10月25日～2026年2月23日
千葉県立中央博物館	房総うみの幸 大百科ー千葉の豊かな海と食文化ー	7月12日～9月23日
港区立みなと科学館	2025 年 夏の企画展「はれるんと学ぼう! みんなの気象展」	7月8日～9月7日
	2025 秋の企画展 ちがうってふしぎ! ～絵本から考えるネコとイヌ～	9月10日～11月24日
国立科学博物館	特別展「氷河期展 ～人類が見た4万年前の世界～」	7月12日～10月13日
	国立科学博物館・竹中大工道具館共同企画展 「植物×匠 めぐるいのち、つなぐ手しごと」	7月29日～9月28日
	学習マンガのひみつ	10月10日～11月9日
たばこと塩の博物館	けむりと人々のつながりーメソアメリカの記憶	9月20日～12月21日
郵政博物館	ーくまのぬいぐるみの郵便屋さんー ぼすくま 原画展	8月2日～9月23日
	企画展「終末のワルキューレ」	10月4日～12月14日
日本科学未来館	深宇宙展ー人類はどこへ向かうのか To the Moon and Beyond	7月12日～9月28日
神奈川県立生命の星・ 地球博物館	特別展「初三郎式、かながわの描き方ー地形表現の科学ー」	7月19日～11月9日
平塚市博物館	「平塚空襲」展	7月16日～9月4日
	夏期特別展「湘南ロケットピア」	7月19日～9月7日
	「日本産アゲハチョウ属幼生期のすべて」展	10月2日～11月3日
	秋期特別展「丹沢でみつけたスゴい石ー丹沢山地の化石・岩石・鉱物ー」	10月25日～2026年1月12日

※施設の一部を閉鎖している館園や、入館に際し予約を必要とする館園がございます。各館園のホームページをご確認ください。

開 催 館	展 覧 会 名	開 催 期 間
岐阜県博物館	博物館・岐阜大学連携 特別企画展「鳥の卵のひみつ - Bird Eggs -」	7月12日～9月21日
岐阜かかみがはら 航空宇宙博物館	初飛行 40 周年記念企画展「飛鳥」	7月19日～2026年1月12日
中津川市鉱物博物館	第32回企画展「黄色い石・金いろの鉱物」	7月19日～12月21日
ふじのくに地球環境史 ミュージアム	標本サファリ - 大地の動物・水の動物 -	4月15日～11月3日
	蝶聖・高橋真弓氏を偲んで ～富士川から日本列島へ、そして世界へ～	4月15日～11月3日
鳳来寺山自然科学博物館	日本と世界のカタツムリ展	6月1日～9月7日
	秋・冬の特別展「草木染め展 身近な草花・樹木を使って」	10月18日～2026年1月18日
名古屋市科学館	特別展「古代 DNA - 日本人のきた道 -」	7月19日～9月23日
滋賀県立琵琶湖博物館	淡水魚から見る世界の湖沼	7月19日～9月28日
	第33回企画展示 川を描く、川をつくる - 古地図で昔の堤をさぐる -	7月19日～11月24日
大阪市立科学館	日本科学未来館 巡回展示「生成 AI との対話から未来を考える MIRAI-Bit」	9月6日～10月5日
高槻市立自然博物館 (あくあびあ芥川)	企画展「水に生きる虫たち～水中生活のひみつ～」	7月1日～9月28日
伊丹市昆虫館	特別展「いたこんカーニバル」	7月19日～11月25日
明石市立天文科学館	極限時空・ブラックホールと重力波	7月19日～9月7日
	夏休み・児童生徒作品展～小学生の部～	9月13日～9月28日
鳥取県立博物館	鳥取県立博物館企画展 とことん! 昆虫展	7月12日～9月15日
	大カブコン展 ―世界を魅了するゲームクリエイション	10月19日～12月7日
出雲科学館	身近な科学のふしぎ写真展	10月11日～11月24日
島根県立三瓶自然館	夏期特別企画展「太陽系大冒険!」	7月19日～9月28日
	第5回日本星景写真協会写真展 星の風景	10月18日～11月24日
倉敷市立自然史博物館	第34回特別展「くらしを支えた岡山の石たち」	9月7日～11月9日
笠岡市立カブトガニ博物館	特別展示「Let's Beach Combing」展	7月19日～9月28日
広島市健康づくりセンター 健康科学館	ただ今参上! 忍者でござる 学べ健康の術	7月19日～11月3日
ヌマジ交通ミュージアム (広島市交通科学館)	夏季企画展「PUI PUI モルカー×ヌマジ交通ミュージアム モルカーとわくわくクルマワールド2」	7月18日～9月7日
	秋季企画展「広島駅のいまむかし - 新幹線がやってきた -」	10月10日～11月30日
愛媛県総合科学博物館	特別展「史上最大のニホンカワウソ展」	7月12日～9月23日
佐川地質館	特別展「蛇紋岩と謎に包まれた黒瀬川帯」	5月24日～2026年5月10日
北九州市立自然史・歴史博物館	夏の特別展「Bones2 ほねほね運動会 ～はしる! とぶ! つかむ!～」	7月19日～9月23日
	企画展「おもちゃでタイムトラベル 昭和50年」	7月19日～11月3日
	秋の特別展「「べらぼう」におもしろい印刷展」	10月11日～12月7日
熊本県博物館 ネットワークセンター	花をよ～く見てみよう	6月24日～12月21日
宮崎県総合博物館	ティラノサウルス博 2025	7月12日～9月7日
	焼酎のすゝめ - 「宮崎の本格焼酎」の歴史と酒造と発酵のふしぎ -	10月18日～11月30日

※次号(11月号)に掲載の11月12月の特別展情報は9月19日(金)までにお寄せください。

リニューアル情報

※次号(11月号)に掲載のリニューアル情報は9月10日(水)までにお寄せください。

つくばエキスポセンター

〔更新箇所〕 1階展示場「たつまきをつくってみよう」

〔更新内容〕 小さな竜巻を見せる展示のリニューアルを行いました。支柱から横に噴き出す空気による回転渦と、上部のファンによる上昇気流で竜巻を発生させます。長年当館で人気のある展示でしたが、経年によりメンテナンスが難しくなってきたため、新しく製作することとしました。リニューアルした展示では、照明を赤・青・緑のLEDとすることにより、竜巻の発生をイメージした照明演出を追加し、竜巻が出来上がるまでの間も楽しめるようにしました。また、水蒸気の噴霧量や各種ファンの強さを変更できるようにして、竜巻の芯がはっきり見えるよう随時調整を行うことで、竜巻を観察しやすいようにしました。



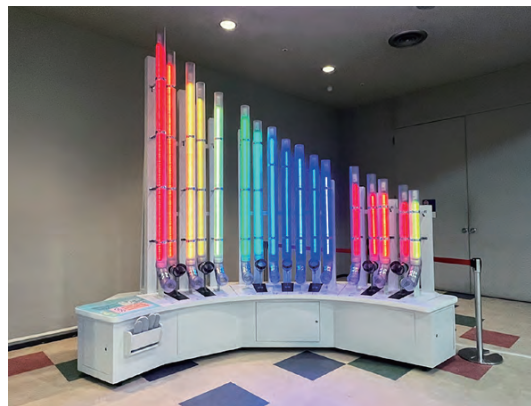
たつまきをつくってみよう

〔公開日〕 2025年3月19日

〔担当者〕 株式会社Gakken

〔更新箇所〕 1階展示場「メロディパイプ」

〔更新内容〕 音の高さのしくみについて体験しながら学習できる展示です。長さが異なる17本のパイプが並んでおり、パイプの口をたたくとそれぞれ異なる音階の音が鳴るようになっていました。向かって左側の長いパイプをたたくと低い音階の音、右側の短いパイプをたたくと高い音階の音が鳴るほか、パイプの中に設置したLEDライトがパイプごとに異なる色で光るので、視覚的にも楽しめます。自由にたたいて音を鳴らして体験するほか、ガイドモードを使うと、順番に光るパイプを追いかけてたたくことで童謡を演奏することもできます。



メロディパイプ

〔公開日〕 2025年3月19日

〔担当者〕 株式会社Gakken

ふじのくに地球環境史ミュージアム

[更新箇所] 新常設展示和室「ふじのくにの食」を新設

[更新内容] 食文化と伝統文化を活かしたガストロノミーツーリズムを通して静岡県の豊かな生物多様性を紹介し、地域に根ざした食材や自然環境の保全について考える展示です。

当館は高校跡地をリノベーションした自然系博物館であることから、茶道部などの活動の場“作法室”が畳敷きの和室のまま残されていました。この作法室（講座室E）を和室×食×旅の視点から改修しました。

見どころは、次の2つです。

- 1) 静岡県の形をしたドイツ箱に配置されたアクリル樹脂包埋標本や剥製標本
- 2) 4枚の襖がひと続きになる大きな絵図

静岡県の食の背景には、特色ある地史と豊かな生物のみならず、古くからの人々のくらしや地域に根ざした伝統文化との関わり合いがあったことを紹介しています。

[更新面積] 98.55㎡

[公開日] 2025年3月22日

[準備期間] 1年

[担当者] 株式会社丹青社



改修前

(撮影：竹田武史)



改修後1



改修後2

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向／教育用地学標本



地学標本／化石・鉱物・岩石
古生物／レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

since 1974

◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks
株式会社 東京サイエンス
TEL.03-3350-6725 FAX.03-3350-6745
http://www.tokyo-science.co.jp
E-mail:info@tokyo-science.co.jp
〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル

Practical Specimens for Study of Earth Science

Giving Shape to Ideas

KONICA MINOLTA

DYNAVISION-LED
LED DOME SYSTEM

革新的なテクノロジーを結集した
新しいLED映像システムで
リアルな臨場感と美しい映像体験を



ユニカミノルタプラネタリアム 製品 検索

ユニカミノルタプラネタリアム
PLANETARIA YOKOHAMA

バンドー神戸青少年科学館

〔更新箇所〕 展示室 「物理・化学」・「サイエンスパーク」

〔更新内容〕 バンドー神戸青少年科学館ではこの度、1階部分の2つの展示室が全面リニューアルしました。「ふれる・つくる・つながる 社会とともにつくり、未来（あす）へ広がる科学館」の基本理念をもとに、好奇心を育む新たな展示室へと生まれ変わりました。

科学館に入ってすぐにある展示室「物理・化学」では、色々なものの動き、動きの仕組み、ものを動かす力の3つをテーマとした、科学の基礎を体感できる展示で構成し、科学館の導入としての役割をもたせています。コア展示として「モーションステージ」「ボールコースター」「機構キューブ」を設置。シンボル展示「スパークポッド」は大きな円盤状の回転台を持った大型実験装置で、装置の中に入りコリオリ力や遠心力を体で感じるすることができます。

もう一つの展示室「サイエンスパーク」では未就学児から小学校低学年が主役になり思い思いに遊びながら科学を体験できる展示室です。ひょうごの木を使った積み木やバランスの使い方を学ぶボルダリング、材質の違うすべり台など、幼児も安全に遊べるキッズコーナーを拡充しました。また、パーク内を大きく回るように配置された「感覚サーキット」では時間・長さ・音の大きさ・重さ・角度の5つで、自分の感覚がどのくらい正確かを子供も大人も一緒に楽しみながら競うことができる他、「強風体験」では小型台風並みの風が体験できたり、四角い車輪の三輪車で凹凸の路面を進んだり、体を動かして楽しく不思議を学ぶ装置が展示室全体に配置されています。

さらに科学実験ショーを毎日おこなうサイエンスショーエリアを刷新。ダイナミックな演示が可能になり、オープニングプログラムとして「回転」をテーマにしたショーを実施します。また、暗幕でショーエリアを囲み暗室での実験が可能になった他、客席が可動式のためワークショップや講演会などスタッフや来館者同士が交流する場として活用することもできます。

今回のリニューアルでは来館者の利便性向上を目的に、トイレのバリアフリー化と、施設内サインの見直しもおこないました。ぜひバンドー神戸青少年科学館にご来館ください。

〔更新面積〕 第1展示室 (600㎡)

第6展示室 (640㎡)

南館、北館、団体便所 (260㎡)

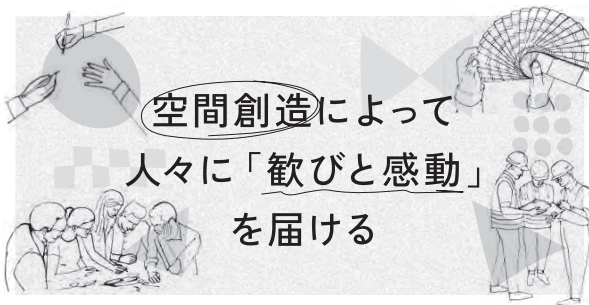
〔公開日〕 2025年3月26日（水）

〔準備期間〕 2024年9月1日（日）～2025年3月25日（火）

〔担当業者〕 株式会社トータルメディア開発研究所

〔総工費〕 約8億円

Panasonic
CONNECT



空間創造によって
人々に「歓びと感動」
を届ける

株式会社 乃村工藝社

東京都港区台場2丁目3番4号 TEL: 03-5962-1171 (代表)



物理・化学 入口



物理・化学 全体



物理・化学 スパークポット



物理・化学 モーションステージ



サイエンスパーク 感覚サーキット



サイエンスパーク キッズコーナー



サイエンスパーク 四角い三輪車



サイエンスショーステージ

新展示で跳んで、旧展示で測る「天体の重力差」



栃木県子ども総合科学館公式HP
<https://t-csm.jp/>

新旧の展示品が並ぶ2点の配置をお勧めします。新展示「重力ジャンプ」は、4つの天体の重力差をジャンプで体験できます。そして隣にある旧展示「宇宙体重計」で、その天体での見せかけの体重が測れます。各天体の重力の差をジャンプ力と体重という別の物で比較できるのです。このように、補完しあう展示配置は随所にあり、来館される皆様に視点を変えた比較の面白さを探することも楽しんで頂きたいと思います。オープンの10月をお楽しみに。



次回執筆者は、日立シビックセンター科学館 照沼 佑介さんです。

令和7年度 東レ理科教育賞の募集

【東レ理科教育賞】

◆対象：東レ理科教育賞は、理科教育を人間形成の一環として位置づけた上で、中学校・高等学校レベルでの理科教育における新しい発想と工夫考案にもとづいた教育事例を対象としています。論説や提案だけではなく、教育の現場で実績のあるものを期待しています。生徒の科学に対する興味を深めるために、例えば次のような事項が考えられます。

- (1) 実験・観察、演示などの教材・教具の開発とその実践例。
- (2) 効果的な実験法、器材の活用法、自発的学習をうながす工夫など。
- (3) よりよい理科教育のための指導展開。

◆応募資格：中学校・高等学校の理科教育を担当、指導、または研究する方。

◆締切日：令和7年9月30日(火) 必着

詳細は公益財団法人東レ科学振興会のホームページ(<https://www.toray-sf.or.jp/awards/education/>)をご確認ください。

全科協ニュース編集委員

石浜佐栄子(神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員)
 筋野 美穂(多摩六都科学館学芸員)
 平田慎一郎(きしわだ自然資料館学芸員(特命参事))
 弘田 澄人(川崎市青少年科学館(かわさき宙と緑の科学館)天文担当係長)
 丸山 啓志(千葉県立中央博物館研究員)
 望月 貴史(岩手県立博物館専門学芸員)
 関根 則幸(国立科学博物館学習支援部広報・連携課長)

全科協事務局

国立科学博物館
 学習支援部 広報・連携課
 (担当:登島・斉藤・清水)
 TEL 03-5814-9171
 info@jcsm.jp
 発行日 2025年9月1日
 発行 全国科学博物館協議会 ©
 〒110-8718
 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
 印刷 株式会社セイコー社